

史跡有岡古墳群(宮が尾古墳) 保存整備事業報告書



1997

善通寺市教育委員会

史跡有岡古墳群(宮が尾古墳)

保存整備事業報告書



1997

善通寺市教育委員会

序

普通寺市周辺には旧石器時代以降の様々な時代の遺跡が残り、特に市街地北部に広がる旧練兵場遺跡は瀬戸内海沿岸部でも中枢的集落遺跡であることが知られています。この集落は弥生時代に誕生し、古墳時代には広大な平野部を拠点にさらに発展します。そして、この地を統治していた豪族たちは市南西部の丘陵部を聖地として数多くの墳墓を造りました。

これらの墳墓群は私たちの生活基盤であるこの土地を最初に開いた祖先の足跡であるばかりではありません。副葬品からは当時の工芸技術や生活の様子が、墳丘や石室からは高度な土木技術の一端がうかがえますし、石室内の壁画などは文字による資料が極めて少ない時代の葬送儀礼や思想を知る上でとても重要であります。

昭和57年の王墓山古墳の発掘調査を契機に、市内に残る各時期の代表的な古墳6基が昭和59年に国の史跡指定を受けました。そして、昭和61年から平成3年までの6年間にわたる王墓山古墳の保存整備事業に続き、平成4年からは線刻壁画で装飾された宮が尾古墳の保存整備事業を行って参りました。事業は平成8年度で無事に完了いたしましたが、整備に伴う調査を通じて驚くべき新たな事実も解明され、宮が尾古墳の保存に大きな意味が加わりました。

このたびの保存整備事業及び報告書の刊行にあたり、ご指導を賜りました諸先生各位に厚くお礼申し上げます。また、発掘調査に携わられた調査関係者、及び整備工事関係者の皆様のご苦労にも心から感謝申し上げます。

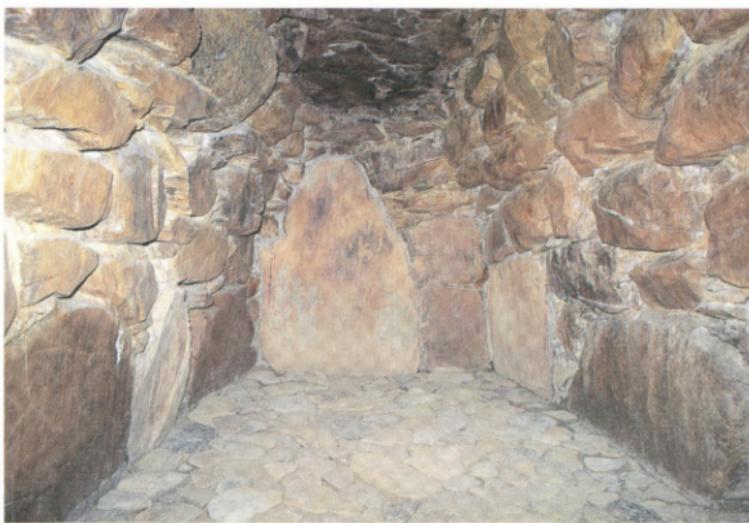
平成9年3月31日

普通寺市教育委員会

教育長 勝田英樹



宮が尾古墳全景



宮が尾古墳玄室内部



宮が尾 2号墳全景



宮が尾 2号墳玄室内部



宮が尾古墳横穴式石室实物大模型設置状況



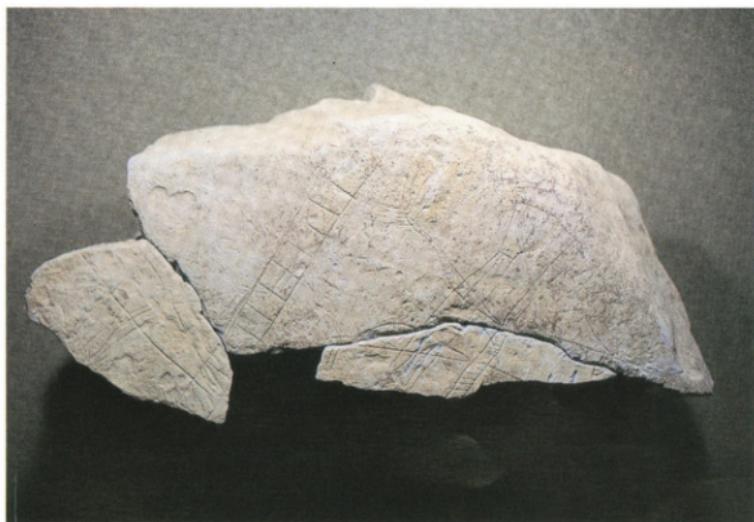
史跡有岡古墳群及び周辺地形模型設置状況



史跡説明板（陶板）設置状況



宮が尾古墳奥壁画（人物群）



宮が尾古墳墳丘出土線刻石材と2号墳石室出土線刻石材の接合状況



宮が尾古墳出土土器



宮が尾 2号墳出土土器



宮が尾古墳出土土器



宮が尾古墳及び2号墳出土装飾品

例　　言

1. 本書は、普通寺市教育委員会が国庫補助事業として実施した、史跡有岡古墳群（宮が尾古墳）保存修理事業及び、修理事業に伴い実施された発掘調査の報告書である。
2. 宮が尾古墳は普通寺市普通寺町字宮が尾3214-45に所在する。
3. 史跡有岡古墳群（宮が尾古墳）保存修理事業は平成4年度から平成8年度までの5ヵ年、継続して実施された。補助事業名は以下のとおりである。

平成4年度 史跡有岡古墳群保存修理事業
平成5年度 史跡有岡古墳群史跡等買上事業
平成6年度 史跡有岡古墳群保存修理事業
平成7～8年度 史跡有岡古墳群史跡活用特別事業

4. 本事業の組織は本文中（17頁）に掲載した。
5. 本書の編集作成は普通寺市教育委員会文化振興室主事篠川龍一が行い、下記の頁に関する
は、奈良国立文化財研究所の先生方に墨稿を賜った。紙面を借りて厚くお礼申し上げます。

篠川 龍一（奈良国立文化財研究所・平城宮跡整備調査部長）	118頁
内田昭人（奈良国立文化財研究所・飛鳥文化財調査センター・飛鳥宮跡研究部・研究課）	120頁
6. 修理事業に伴い実施した発掘調査の際の実測、写真撮影は四国学院大学考古学研究会ほかの協力を得て篠川が行った。また、本書に掲載した遺物の実測は岩井弘恵の協力を得て笠川が行い、遺物（土器）の写真撮影のみ柳華堂（奈良県）に委託した。
7. 本事業及び本書の作成にあたっては、次の方々、機関より多大な御指導・御援助並びに資料提供を得た。記して謝意を表します。（敬称略・順不同）

田中哲雄（文化庁）、町田章、内田昭人（奈良国立文化財研究所）、丹羽佑一（香川大学）、
吉田重幸、松浦修、香川県教員委員会、香川県埋蔵文化財調査センター、香川県普通寺土木事務所、農林水産省四国農業試験場、四国電力株式会社、片桐孝浩、山本英之、山元敏裕、
楠本真紀子、岩井弘恵、四国学院大学考古学研究部、空間文化開発機構、太田文雄（太田哲園）、株式会社 日展、株式会社 瑞穂、大塚オーミ陶器株式会社大阪支店、てつきのこ
地元協力者：藤田紹雄、新泡功成、香川昭義

8. 整備事業に伴う発掘調査によって、特異な位置から線刻画が発見された。この意義を考える上で国内各地の装飾古墳の類例を調べるアンケート調査を実施し、下記の機関から回答をいたいたい。記して謝意を表します。（敬称略・順不同）

島根県埋蔵文化財調査センター、大分県教育厅文化課、鹿児島県埋蔵文化財調査事業団、群
広島県埋蔵文化財調査センター、徳島県埋蔵文化財調査事業団、岡山県古代吉備文化財セ
ンター、熊本県教育厅文化課、側かながわ考古学財団、群馬県文化財調査財團埋蔵文化財調
査事務所、秋田県教育厅文化課、側山形県埋蔵文化財センター、青森県埋蔵文化財調査セン
ター、側滋賀県文化財保護協会、側徳島県埋蔵文化財センター、側山口県教育財团、側高知
県文化財調査センター、佐賀県教育厅文化財課、長崎県教育厅文化課、福井県教育
厅埋蔵文化財調査センター、北九州市教育文化事業团埋蔵文化財調査室、側岩手県文化振興
事業团埋蔵文化財センター、奈良県立橿原考古学研究所、側愛媛県埋蔵文化財調査センター、
側千葉県文化財センター、神戸市教育委員会文化財課、側岐阜県文化財保護センター、東京
都埋蔵文化財センター、鳥取県埋蔵文化財センター、側和歌山县文化財センター、側新潟県
埋蔵文化財調査事業団、側福井県文化財センター遺跡調査課、側愛知県埋蔵文化財センター、
三重県埋蔵文化財センター

目 次

第一章 遺跡周辺の地理と歴史.....	6
第二章 宮が尾古墳.....	12
1. 県下初の装飾古墳の発見（昭和41年）.....	12
2. 史跡指定までの経緯.....	15
第三章 保存整備事業に伴う発掘調査と公有地化事業.....	17
1. 平成4年度事業（墳丘の確認調査）.....	17
2. 平成5年度事業（公有地化事業）.....	21
第四章 整備に伴う発掘調査.....	23
1. 平成6年度の発掘調査.....	23
(1)宮が尾古墳墳丘の検出.....	23
(2)宮が尾2号墳の発見.....	27
2. 平成7年度の発掘調査.....	28
(1)宮が尾古墳.....	28
①調査着手前の状況.....	28
②前庭部から羨道部にかけての発掘調査.....	34
③出土遺物.....	41
④墳丘の発掘調査.....	51
⑤線刻のある石材.....	52
(2)宮が尾2号墳.....	58
①未調査部分の発掘調査.....	58
②出土遺物.....	62
③新たな線刻石材の発見と宮が尾古墳墳丘出土線刻石材との接合.....	80
④線刻石材のモチーフ.....	83
3. 県内の装飾古墳～宮が尾古墳と周辺の装飾古墳を中心として～.....	84
第五章 保存整備事業～ふるさと歴史の広場づくり事業～.....	91
1. 平成7年度事業.....	91
(1)宮が尾古墳開口部と羨道部の解体復元工事.....	91
(2)周辺部の擁壁工事.....	95
(3)その他の工事.....	97
2. 平成8年度事業	100
(1)宮が尾2号墳復元工事	100
(2)宮が尾古墳横穴式石室原寸大復元模型と制作と設置工事	103
(3)史跡有岡古墳群全体模型の制作と設置工事	106
(4)案内説明板工事	108
(5)その他の工事（植栽工事・給水工事・給電工事・休息施設工事等）	112
第六章まとめ	117
1. 宮が尾古墳及び2号墳の文化財的価値	118
奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長 町田 章	
2. 史跡保存整備事業の評価	120
奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター保存工学研究室 主任研究官 内田昭人	

図版目次

表表紙 整備が完了した史跡有岡古墳群(宮が尾古墳)全景 ~南から~

裏表紙 史跡有岡古墳群(宮が尾古墳)玄室奥壁線刻壇面 ~大勢の人が乗った舟~

カラーグラビア

- ① 宮が尾古墳全景・宮が尾古墳玄室内部
- ② 宮が尾2号墳全景・宮が尾2号墳玄室内部
- ③ 宮が尾古墳横穴式石室实物大模型設置状況
- ④ 史跡有岡古墳群及び周辺地形模型設置状況
- ⑤ 史跡説明板(両板)設置状況
- ⑥ 宮が尾古墳奥壁壁画(人物群)・宮が尾古墳壇丘出土線刻石材と2号墳石室出土線刻石材の接合状況
- ⑦ 宮が尾古墳出土土器・宮が尾2号墳出土土器
- ⑧ 宮が尾古墳出土上器・宮が尾古墳及び2号墳出土装飾品

図

第1図	調査地遠景	6
第2図	調査地と周辺の主要遺跡	9
第3図	宮が尾古墳の発見を伝える紙面	12
第4図	開墾中に発見された石室の入り口	13
第5図	発見直後の石室内部の状況	13
第6図	宮が尾古墳の発掘調査を伝える紙面	13
第7図	宮が尾古墳発掘調査風景	13
第8図	宮が尾古墳周辺地形図	14
第9図	横穴式石室上部に渡られた薄屋	15
第10図	降雨後浸水した石室内部	16
第11図	調査整理委員会開催風景	17
第12図	第1トレンチ検出状況	18
第13図	第2トレンチ検出状況	18
第14図	第3トレンチ検出状況	18
第15図	史跡周辺地形測量図・トレンチ配置図	19
第16図	墳丘埋没状況測量図	19
第17図	樹脂詰去試験作業風景	20
第18図	公有地化前の状況	21
第19図	公有地化後の状況	21
第20図	宮が尾古墳及び隣接地公有地化状況	22
第21図	宮が尾古墳横糸織出作業風景	23
第22図	車機による掘削作業と進入路	23
第23図	検出された宮が尾古墳壇丘と測量風景	23
第24図	宮が尾古墳及び2号墳横糸織出状況実測図	24
第25図	第1トレンチ検出状況	25
第26図	第2トレンチ検出状況	25
第27図	第2トレンチ南壁土居実測図	25
第28図	第3・第5トレンチ南壁土居実測図	26
第29図	第3トレンチ検出状況	26
第30図	第6トレンチ検出状況	26
第31図	宮が尾2号墳検出状況	27
第32図	宮が尾2号墳玄室検出状況	27
第33図	奉納事務着手前の宮が尾古墳横穴式石室実測図	29
第34図	宮が尾古墳出土遺物実測図	30
第35図	宮が尾古墳横穴式石室玄室奥壁壁面実測図	31
第36図	玄室東壁不明線刻尚夷測図	31
第37図	玄室西壁武人画実測図①	33
第38図	玄室西壁武人画実測図②	33

第39図	宮が尾古墳調査区配図図	34
第40図	前部調査区検出状況①	34
第41図	宮が尾古墳前部調査区検出状況実測図	35
第42図	宮が尾古墳前部土器堆積状況実測図	36
第43図	前部調査区検出状況②	36
第44図	前部調査区検出状況	37
第45図	前部調査区検出状況実測図	37
第46図	開口部の石材崩落状況	38
第47図	美道部床面検出状況実測図	38
第48図	美道部完掘後の横穴式石室実測図	39
第49図	美道部床面検出状況	39
第50図	完掘後の開口部(全景)	40
第51図	完掘後の開口部(西壁)	40
第52図	完掘後の開口部(東壁)	40
第53図	出土装飾品実測図	41
第54図	出土土器(須恵器)実測図①	42
第55図	出土土器(須恵器)実測図②	43
第56図	出土土器(須恵器)実測図③	44
第57図	出土土器(須恵器・土師器)実測図④	45
第58図	出土装飾品写真	46
第59図	出土土器①(須恵器)	46
第60図	出土土器②(須恵器)	47
第61図	出土土器③(須恵器)	48
第62図	出土土器④(須恵器)	49
第63図	出土土器⑤(須恵器・土師器)	50
第64図	漢造の変形部分	51
第65図	美道東壁の変形箇所と補強の状態	51
第66図	墳丘調査区での発掘作業風景	51
第67図	墳丘の構築過程	52
第68図	墳丘内部の石列(A~A')	52
第69図	墳丘内部の石列(B~B')	52
第70図	墳丘土層及び土留石材検出状況実測図	53・54
第71図	墳丘調査区北側壁面上層(埴瓦部)	55
第72図	墳丘調査区北側壁面上層(周溝部)	55
第73図	墳丘調査区東側壁面上の彫刻石材	56
第74図	墳丘調査区北側壁面上の彫刻石材	56
第75図	墳丘調査区の完掘状況	56
第76図	宮が尾古墳墳丘調査区北側裏面から取り出された石材の線刻画	57
第77図	発見当時の2号墳玄室検出状況	58
第78図	2号墳墳丘検出状況及びトレンチ配図	58
第79図	2号墳墳丘トレンチ上層実測図	59
第80図	2号墳開口部調査区上層実測図	60
第81図	2号墳開口部発掘調査風景	60
第82図	第8号トレンチ南壁墳丘断面	61
第83図	2号墳美道部遺物出土状況	61
第84図	2号墳検出状況(全景)~北東から~	61
第85図	2号墳検出状況(全景)~南西から~	62
第86図	2号増築穴式石室床面実測図(玄室礎床上面及び基底部)	62
第87図	2号増築穴式石室床面実測図(玄室礎床下層及び美道部遺物出土状況)	63
第88図	2号墳出土装飾品実測図	64
第89図	2号墳出土装飾品	64
第90図	2号墳出土鉄製品実測図	65
第91図	2号墳出土土器(須恵器)実測図①	66
第92図	2号墳出土土器(須恵器)実測図②	67
第93図	2号墳出土土器(須恵器)実測図③	68

第94図	2号墳出土上器(須恵器・土師器)実測図④	69
第95図	2号墳出土上器(混入遺物)実測図⑤	70
第96図	2号墳出土漆製品	71
第97図	2号墳出土土器①(須恵器)	72
第98図	2号墳出土上器②(須恵器)	73
第99図	2号墳出土上器③(須恵器)	74
第100図	2号墳出土上器④(須恵器)	75
第101図	2号墳出土上器⑤(須恵器)	76
第102図	2号墳出土上器⑥(須恵器)	77
第103図	2号墳出土土器⑦(土師器)	78
第104図	2号墳出土上器⑧(混入遺物)	79
第105図	2号墳峯道北西側塗面	80
第106図	2号墳峯道の線刻石材	80
第107図	線刻石材取り外し状況	80
第108図	線刻石材レプリカの作成	81
第109図	線刻石材峯道壁面への復元	81
第110図	線刻石材接合状況実測図・拓影	82
第111図	新たに発見された線刻画の解説	83
第112図	高井田横穴群4・4号墳玄室右壁壁画	83
第113図	高井田横穴群2・27号墳天井壁画	83
第114図	圖5 2号墳渓道(右壁)壁画	84
第115図	圖5 2号墳渓道(左壁)壁画	85
第116図	夫婦岩1号墳玄室(右壁)壁画	85
第117図	夫婦岩1号墳玄室(左壁)壁画	85
第118図	尚11号墳渓道(左壁)壁画	87
第119図	鷺の11号墳玄室(右壁)壁画	87
第120図	綾織塚峯道(右壁)壁画	87
第121図	彌至線刻画及び開堀線刻画実測図	88
第122図	平成7年度保存整備工事記録写真1	92
第123図	復元後の横穴式石室実測図	93
第124図	平成7年度保存整備工事記録写真2	94
第125図	宮が尾2号墳丘工事断面図	95
第126図	平成7年度保存整備工事記録写真3	96
第127図	平成7年度事業設備構造物配置図	97
第128図	平成7年度事業設備構造物性能図①	98
第129図	平成7年度事業設備構造物性能図②	99
第130図	2号墳後元工事記録写真①	101
第131図	2号墳復元工事詳細図	102
第132図	2号墳復元工事記録写真②	102
第133図	石室原寸大模型詳細図①	103
第134図	石室原寸大模型設置工事記録写真	104
第135図	石室原寸大模型詳細図②	105
第136図	有岡古墳群及び周辺地形模型設置工事記録写真	106
第137図	有岡古墳群及び周辺地形模型設置工事詳細図	107
第138図	史跡説明板設置工事記録写真	108
第139図	史跡説明板設置工事詳細図①	109
第140図	史跡説明板設置工事詳細図②(説明板原稿)	110
第141図	史跡説明板設置工事詳細図③(説明板原稿)	111
第142図	史跡説明板設置工事詳細図④(説明板原稿)	112
第143図	史跡内施設詳細図①(給電・給水関係)	113
第144図	史跡内施設詳細図②(園路・休息施設・排水関係)	114
第145図	史跡内施設詳細図③(植栽関係)	115
第146図	史跡内植栽状況	116

第一章 遺跡周辺の地理と歴史

善通寺市は香川県西部の内陸部に位置し、真言宗開祖の弘法大師（空海）が誕生した土地として有名な田園都市であり、總本山善通寺の門前町として発達している。

東は丸亀市、西は三豊郡高瀬町・三野町、南は仲多度郡琴平町、北は仲多度郡多度津町と境を接している。

善通寺市周辺に広がる丸亀平野は、土器川や金倉川・弘田川の沖積によって形成された香川県下最大の沖積平野で、これらの河川による扇状地・氾濫原・小三角州などから形成されており、南から北に下るゆるやかな傾斜になっているため、たいていの場所から瀬戸内海や対岸の岡山を望むことができる。この河成沖積層の土壤は、下層土が灰褐色のマンガン結核を含む黄褐色砂質土層、表層70~80cmが強粘土質砂礫層で構成されており、通常弥生時代以後の遺構はこの下層上面に遺存している。この黄褐色砂質土層中には希に縄文土器片が含まれていることが知られていたが、近年実施された四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査などによって、この土層は縄文時代後期から晩期にかけて堆積したものであることが確認されている。

また、善通寺市の北には讃岐の中世山城跡を代表する天霧城跡が山頂部に所在する天霧山、西から東にかけては、火上山・中山・我拝師山・筆の山・香色山が麓をつらねて並んでおり、五岳と呼ばれるこれらの山塊は、あたかも五枚の屏風をたてかけたようにそびえていることから、この山麓の地は屏風ヶ浦とも呼ばれ、当地の人々に親しまれ、古くから信仰の対象であったことが伺える。その南には、中山に連なる東部山・有岡の里を経て大麻山がそびえており、平地中には鶴が峰・磨臼山・如意山・鉢伏山・甲山などの小丘が散在している。



第1図 調査地遠景

瀬戸内海の南岸に位置し気候と風土に恵まれた丸亀平野は、かなり古くから人間の文化が開けた土地であり、丸亀市の中ノ池遺跡・善通寺市の五条遺跡・普通寺市から仲多度郡にかけて広がる三井遺跡など、弥生時代前期から中期にいたる同時代の遺跡群が知られている。中ノ池遺跡では環濠と想定される三重の大溝が検出され、弥生時代前期の古段階の特徴をもつ弥生土器を中心に、一部中期的様相を呈するものまで出土している。三井・五条遺跡では、遺構・遺跡の範囲などについては現在も全く不明の状態であるが、出土した土器片については、畿内第1様式の中段階から新段階に相当することが確認されている。

また、これらの遺跡群は自然堤防上に立地すると考えられており、現在の海岸線からの距離は2～3kmを計るが、当時の復元海岸線が現在の標高5mあたりと推定すれば、三井・中ノ池遺跡などは海岸部に形成された集落であることがわかる。そして、更にこれらの遺構が遺存する黄褐色砂質土層とこの下の洪積層の間には、縄文時代後期から晩期の生活痕が確認されている。また、四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査によって、吉原町から旧石器も確認されており、現在のところ善通寺市の古代文化は約2～3万年前まで遡ることができるようである。

善通寺市街地の北一帯には香川県を代表する弥生時代の中枢的な集落遺跡がある。西は筆の山の山裾から、東は四国農業試験場の敷地にまで及んでおり、ここがもと練兵場用地であったことから旧練兵場遺跡と呼ばれている。そして、ここから東には九頭神遺跡・稻木遺跡・石川遺跡と続いているが、いずれの遺跡も近年までは本格的な調査は実施されておらずその詳細は明らかにされていなかった。

しかしながら、昭和30年頃の四国農業試験場の用地整備工事に伴って、弥生時代前期から後期にかけての小児壺棺十数点・多数の土器、石器類が出土したことや、県道の整備工事の際に国立病院のあたりから弥生土器に加えて須恵器や小玉などが出土したことなどから、遺跡は弥生時代のみならず、古墳時代にまで及んでいることが確認されている。

旧練兵場遺跡はこのように広い範囲に及ぶ可能性が強いばかりでなく、弥生時代前期から後期、古墳時代にかけての連続性が考えられる県下でも例のない存在であることが知られている。ただ、最近の調査によってこの旧練兵場遺跡は幾つかの川道によって分断されていることが解り、旧練兵場遺跡群としてとらえた方が良いと考えられる。

この遺跡群でこれまでに数多くの発掘調査が実施されている。以下、主な調査を順に紹介する。総本山善通寺の西に流れる弘田川沿いで昭和52年に実施された善通寺西遺跡では、弥生時代後期から古墳時代にかけての用水路が検出され、多数の小型丸底壺・船の櫂や柱材などが出土しており、生活基盤である水田域の拡大が行われたことや古い溝の廃絶に伴う祭祀が行われたことが確認されている。続いて、昭和58年には遺跡群の東端部に所在する白鳳時代建立と考えられる善通寺の前寺・仲村廃寺（伝導寺跡）の発掘調査が実施され、寺域の北端と、更にその下層では弥生時代中期から古墳時代にかけての遺構が検出された。

昭和59年には善通寺西遺跡から弘田川沿いの600m程下流に所在する彼ノ宗遺跡の発掘調査が実施されたが、ここでは約1,500m²の調査区から弥生時代中期から後期にかけての40棟以上の竪穴住居・小児壺棺墓15基・無数の柱穴と土坑群、古墳時代の掘建柱建物跡2棟とそれに伴う水路、二重の周溝をもつ多角形墳の基底部など、夥しい生活の痕跡が確認されている。特に

弥生時代終末期の堅穴住居からはその発絕時の祭祀に用いられたと考えられる彷彿した内花鏡片の懸垂鏡や銅鏡、多数の玉類が出土しており、この地区における弥生時代終末期の動向を推測する上で注目されている。昭和60年には彼ノ宗遺跡から東に約500m程の仙遊遺跡で弥生時代後期の箱式石棺と小児壺棺墓3基が発見されたが、この箱式石棺の石材には入れ墨を施した人面や鳥の絵の他、直弧文状の文様が一面に線刻されていたことから全国的な話題となった。

そして、国立病院や四国農業試験場などではこれまで頻繁に発掘調査が行われているが、いずれの調査でも住居跡が複合し密集した状態で遺存しており、正確な集落の規模は今も把握できていない。

また、ここから北方に広がる善通寺平野には、旧練兵場遺跡と同様に弥生時代の古い時期から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡が幾つか知られている。まず旧練兵場遺跡から北方500mあたりには九頭神遺跡があり、ここでは昭和62年に都市計画道路改良工事に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期頃の堅穴住居や小児壺棺墓・箱式石棺墓等が確認されている。九頭神遺跡から東方500mあたりには弥生時代から古墳時代にかけての遺物が多量に散布することで知られる石川遺跡が広がるが、未調査のため詳細は不明である。

九頭神遺跡から北方に隣接する稻木遺跡では、四国横断自動車道路建設に伴う調査が昭和58年5月から昭和60年3月にかけて、また県道普通寺白方線改良工事に伴う調査が昭和61年度と昭和63年度の二回に分けて実施されており、やはり弥生時代から古墳時代にかけての堅穴住居群や墓地、中世の建物跡群などが確認されている。旧地形をみると、これらの集落遺跡群はいずれも旧河道と旧河道の間に形成された微高地に営まれたものであり、これまでの調査結果からいざれも同時期に併存したものであることもわかる。従って弥生時頃の善通寺周辺には、「大集落」というよりはむしろ「地方都市」が誕生していたと考えた方が良いかも知れない。

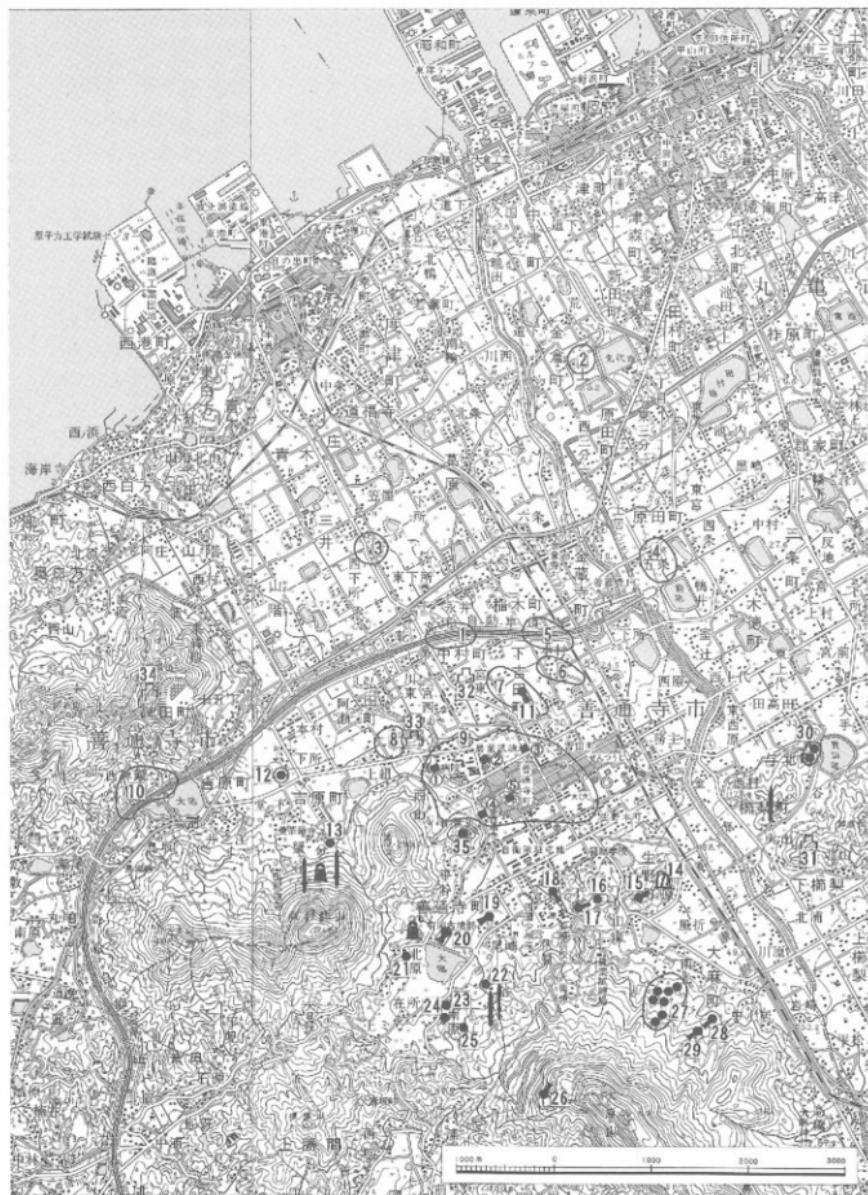
また、善通寺市内からは与北山の陣山遺跡で半形銅劍3口・大麻山北麓の瓦谷遺跡で半形銅劍2口・細形銅劍5口・中細形銅鉢1口の計8口、我拝師山遺跡では計3ヶ所から半形銅劍5口・銅鐸1口、北原シンネバエ遺跡で銅鐸1口など、青銅器が数多く出土しており、旧練兵場遺跡群や周辺部の遺跡群を本擧とした集団との関連も注目される。

やがて弥生時代に開始された稻作文化は完成期を迎え、丸龜平野という肥沃な生産基盤を背景に、独自の技術を持った特定の有力者が灌漑治水事業などをを行い耕作面積を増大させ、地域を代表する権力者となり有岡地区を中心に数多くの墳墓を築くようになり、古墳時代を迎える地の勢力は更に発展を続けている。旧練兵場遺跡では弥生時代の集落遺構群に古墳時代の集落遺構群が幾重にも重なり、発掘調査の際には遺構の複合状況を把握することが困難と思われる状況が頻繁にみられる。

この頃の集落域は市街地から北方と東方に広がりを見せ、市街地の南西部の丘陵部が墓域と推定されている。この地区的古墳は確認されているだけでも400基を超えており、中でも香色

1. 水井遺跡	9. 旧練兵場遺跡群	12. 青龍古墳	20. 菊屋古墳	28. 大麻山経塚
2. 中ノ池遺跡	①彼ノ宗遺跡	13. 大塚池古墳	21. 北原古墳	29. 陣山古墳群
3. 三井遺跡	②仙遊遺跡	14. 石臼山祭祀遺跡	22. 瓦谷1号墳	30. 宝幡寺跡(白鳳)
4. 五条遺跡	③仲村庵寺(白鳳)	15. 石臼山古墳[塚]	23. 御船神社古墳	31. 植梨城跡(中世)
5. 稲木遺跡	④善通寺西遺跡	16. 鶴舞峰山頂古墳	24. 宮脇尾古墳[塚]	32. 仲村城跡(中世)
6. 石川遺跡	⑤善通寺御藍(奈良)	17. 鶴舞峰4号墳[塚]	25. 宮脇尾2号墳	33. 甲山城跡(中世)
7. 九頭神遺跡	10. 矢ノ塚遺跡	18. 丸山古墳[塚]	26. 野田院古墳[塚]	34. 天霧城跡(中世)[塚]
8. 甲山北遺跡	11. 下吉山神社古墳	19. 王墓山古墳[塚]	27. 大麻山掩貸塚	

■:銅鐸出土地 | :銅劍出土地 | :銅矛出土地



第2図 調査地と周辺の主要遺跡

山・筆ノ山・我押師山で北部を、大麻山で南部を限られた弘田川流域の有岡地区は前方後円墳が集中する地域として有名である。

まず古段階の古墳としては、大麻山山麓中でも比較的高所を中心に大麻山埴輪塚、大麻山経塚、野田院古墳、御忌林古墳、大窓経塚古墳、丸山1号・2号墳など数多くの積石塚が築かれているが、御忌林と丸山2号墳以外は全て前方後円墳であり、積石塚古墳分布範囲の最西限に位置している点でも注目できる。中でも野田院古墳は大麻山北西麓（標高405m）のテラス状平坦部という全国的にも有数の高所に立地する丸龜平野最古段階の前方後円墳で、前方部は盛り土、後円部は積石塚で構築されている。

また、有岡地区の平地部分には、前期から後期にかけての多数の前方後円墳が直線的に並んで築かれている。北東から南西方向に順に生野鍾子塚古墳（消滅）・磨白山古墳・鶴が峰2号墳（消滅）・鶴が峰4号墳・丸山古墳・王墓山古墳・菊塚古墳が知られており、その状況から同一系譜上の首長墓群と考えられているが、中でもその中央の小丘陵上に築かれた王墓山古墳は一際目を引く存在である。

古墳時代後期末になると大麻山山麓部の至る所に群集墳が出現する。現存する群集墳の中には線刻画で装飾された横穴式石室が計8基確認されており、それらが共通モチーフを有している点は大変興味深い。宮が尾古墳もそのひとつである。線刻画ではそのモチーフの正体を把握しにくくいものが多いが、宮が尾古墳には、周辺の装飾古墳と共にモチーフの他、人物群や船、騎馬人物が具象的に描かれており、装飾古墳を考える上で極めて貴重な存在と考えられている。

この頃の丸龜平野は金倉川の東が郡河郡、西が多度郡と呼ばれており、多度郡には佐伯一族が勢力をもっており、有岡一帯の前方後円墳群についても佐伯の一代系譜の墓とする考えが有力である。

やがて仏教の伝来に伴い、白鳳期には佐伯の氏寺である伝導寺（仲村廃寺）が旧練兵場遺跡の一角に建立される。しかしながらこの寺は短期間で消滅てしまい、後に500m程南に移転されたものが現在の善通寺伽藍ではないかと考えられている。

奈良時代末、宝亀五年（774）この地の有力豪族であった佐伯氏に弘法大師が誕生する。平安初期、大同二年（807）に唐から帰朝した大師が、長安の青龍寺を模して今の伽藍の場所に真言宗最初の根本道場として善通寺を建立した。創建当時は四町四方の境内に金堂や大塔、講堂、法華堂、西塔、護摩堂の他、四十九の僧房があったといわれているが、平安時代末頃から鎌倉時代、そして南北朝時代にかけては、社会環境の大きな変化に伴い幾度も荒廃の危機に曝された。これを反映するように、善通寺の西側に隣接する香色山山頂では平安時代末頃の経塚群が確認されている。末法思想を背景として、この地に活動の基盤とした貴族（佐伯）や善通寺の僧侶達が造り上げたものであるが、昨年夏の確認調査では、子孫のために經筒などの埋納場所を事前に確保しておいたとみられる上下二段構造の経塚（香色山1号経塚）が発見され注目を集めた。

善通寺は戦国時代、永禄元年（1558）には香川・三好両軍の戦火により焼失してしまう。その後復興が始まるのは、やがて江戸時代に徳川幕府が封建制度を確立してからのことであるが、四国八十八ヶ所巡礼や金毘羅参りが全国的な信仰行事となるのはこの頃であり、八十八ヶ所の

うち五ヶ寺がある普通寺市は普通寺を中心に門前町として活気を取り戻す。

明治29年には第十一師団が設置され、門前町に軍都としての性格を帯びるようになったが、このため道路や鉄道が整備された。この頃建設された洋風デザインの建造物群は市街地に今も多数残され、独特の景観を呈している。

これにより普通寺町として都市化が始まり、昭和29年3月31日に竜川村・与北村・筆岡村・吉原村との合併により市制が施行され、普通寺市が誕生した。

参考文献

『普通寺市の古代文化』	矢原高幸・普通寺市	1973年11月
『普通寺市史・第一巻』	普通寺市	1977年7月
『中の池遺跡発掘調査報告書』	丸亀市教育委員会	1982年3月
『香川叢書・考古篇』	香川県教育委員会	1983年3月
『王墓山古墳調査概報』	普通寺市教育委員会	1983年3月
『五条遺跡発掘調査報告書』	普通寺市教育委員会	1983年11月
『仲村廃寺発掘調査報告書』	普通寺市教育委員会	1984年3月
『彼ノ宗遺跡』	普通寺市教育委員会	1985年3月
『仙遊遺跡発掘調査報告書』	普通寺市教育委員会	1986年3月
『九頭神遺跡発掘調査報告書』	普通寺市教育委員会	1988年3月
『稻木遺跡』	稻木遺跡発掘調査団	1989年3月
『仲村廃寺』	普通寺市教育委員会	1989年3月
『史跡有岡古墳群(王墓山古墳) 保存整備事業報告書』	普通寺市教育委員会	1992年3月
『史跡有岡古墳群(宮が尾古墳) 調査報告』	普通寺市教育委員会	1993年3月
『御館神社古墳発掘調査報告』	普通寺市教育委員会	1993年3月
『青龍古墳調査報告書』	普通寺市教育委員会	1994年3月
『九頭神遺跡・宮が尾古墳 隣接地調査報告書』	普通寺市教育委員会	1995年3月
『香色山山頂遺跡群調査報告書』	普通寺市教育委員会	1996年3月

～四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告書～

『仲村・乾・上一坊遺跡』第一冊	香川県教育委員会	1987年3月
『矢ノ塚遺跡』第三冊	香川県教育委員会	1987年10月
『稻木廃寺』第六冊	香川県教育委員会	1989年3月
『永井遺跡』第九冊	香川県教育委員会	1990年12月

第二章 整備事業に至る過程

1. 県下初の装飾古墳の発見

前章でも紹介したように、香色山・筆ノ山・我拝師山で北部を、大麻山で南部を限られた弘田川流域の有岡地区は県下有数の古墳地帯であり、各時代の古墳が森めいでいる。また山裾部には至る所に後期の群集墳が築造されていたようで、現在知られている古墳以外にも、開墾や土木工事の度に新たな古墳が発見されることも珍しくない。

宮が尾古墳はこの有岡地区でも比較的奥の方、大麻山裾から北西に派生する尾根の先端に構築されていたが、墳丘全体が人為的に埋められていたため、古墳として周知された時期は昭和41年1月と新しい。

埋没の正確な時期は不明であるが、この地区には「慶應2年（1866）、通称寅の洪水によって大麻山から流出し溜池を埋めた多量の土砂を浚渫し尾根に盛ったところ墳丘が隠れた」とことが口伝されている。それまでは墳丘が見えており、石室内への出入りも可能であったということも、整備事業や整備に伴う発掘調査中に地元の古老に聞くことができた。

改めて宮が尾古墳が脚光を浴びるようになったのは、この土地の所有者である新池明治郎氏が当時山林であったこの土地を開墾している際に古墳の存在に気付き、当時香川県立善通寺第一高等学校の教諭であった松本豊胤氏（前香川県埋蔵文化財調査センター所長）が調査し、装飾古墳であることを確認してからである。市立郷土館に発見当時の新聞記事や記録写真が残るので掲載した。発見当時の驚きが伝わる。





第4図 開墾中に発見された石室の入口 (S41.1)



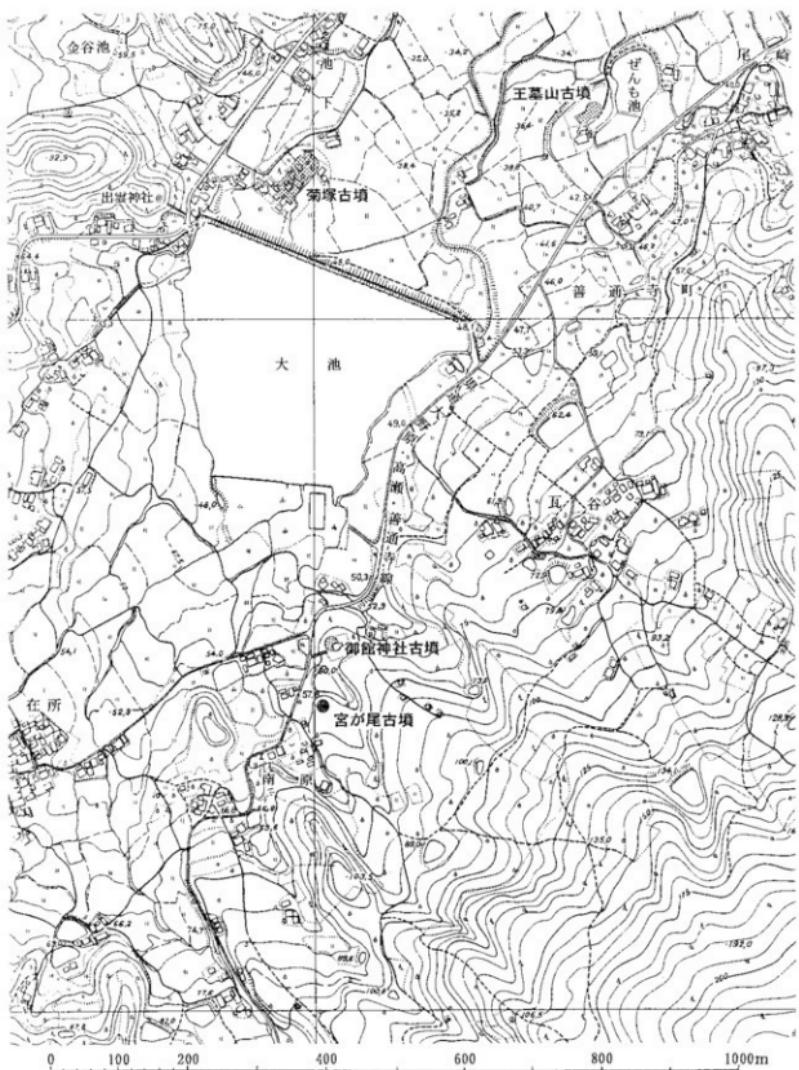
第5図 発見直後の石室内部の状況 (S41.1)



第6図 宮が尾古墳の発掘調査
を伝える紙面 (S41.1)



第7図 宮が尾古墳発掘調査風景 (S41.1)



第8図 宮が尾古墳周辺地形図

松本豊胤氏の「香川県宮が尾絵画古墳調査概報」～古代学研究第45号～によると、発見当時の発掘調査結果は次のとおりである。

墳丘は多量の土砂で完全に埋められていたため、その正確な規模は不明である。開口部は天井石が転落し埋没している。玄室の敷石は全て動かされ奥壁近くに集積されていたが、散乱している石材の状況から見て、玄室のはば全体に敷き詰められていたようである。

石室内部は盜掘されており、副葬品は耳環・刀子・有蓋高杯の蓋がそれぞれ一点ずつ、そして須恵器片が僅かに出土しただけであったが、古墳時代後期末頃の構築とみられる。また、玄室床面からは寛永通寶が出土しており、江戸時代以降開口していた時期があったようである。

さて、盜掘によって副葬品も殆ど残されておらず、地下に埋没した円墳の発見がこれ程までに注目された理由は、言うまでもなく壁画の発見であった。

まず一際目を引くのが玄室奥壁の巨石に描かれた一連の壁画である。人物群や船、騎馬人物などが物語絵巻の如く描かれている。玄室側壁には武人像も見える。これらの壁画についても松本豊胤氏が詳細を報告しているが、保存整備事業に伴い平成4年度に実施した調査の際に再度実測したので次章に掲載し解説した。

(28頁以降参照)

宮が尾古墳は県下で初めて発見された装飾古墳として、また優れた表現の壁画として高く評価され、昭和43年6月4日に県史跡の指定を受けた。併せて石室進入口に鉄製の階段を設置すると共に小屋で上部を覆い保存された。また、新池明治郎氏（故人）のご好意で果樹園内に見学道を設けて定期的な公開も行われるようになった。



第9図 横穴式石室上部に造られた覆屋 (H 4.6)

2. 史跡指定・保存整備事業までの経緯

市内には夥しい数の古墳が残されており、出土遺物も多数伝わるが、正式に発掘調査され記録が残されたものは殆ど無い状態であった。しかし昭和57年3月、個人所有の果樹園中にあつた王墓山古墳で開発に伴う緊急調査が実施された。

全長48mの前方後円墳の主体部は県下で最も古い形式の横穴式石室であり、四国で初めて石屋形が確認された。盜掘は受けていたものの、石室内部は金銅製冠帽をはじめとする豪華な副葬品で満たされていた。

市教育委員会はこの貴重な文化財の発見により、恒久的な保存について県教育委員会を通じて文化庁など関係機関と緊急に協議した。そして昭和59年11月29日、この有岡地区を代表する歴代の首長墓と考えられる王墓山古墳を含む5基の前方後円墳と宮が尾古墳が史跡に指定された。そして、緊急性の高い王墓山古墳の公有地化事業（昭和59年度）に続けて、昭和61年度から平成3年度までの6ヵ月間、保存整備事業が実施された。

整備事業に際しては調査整備委員会が設置され、この同古墳群中の他の古墳の保存についても頻繁に協議されたが、宮が尾古墳は壁画保存の覆屋のため常時は密封の状態であり、年間を

通じて石室内の湿度は極めて高く、夏期は一時的に壁画面は乾燥しているものの、その他の時期は壁画面に多量の結露が見られる状態である。しかも部分的にカビも発生している上に、梅雨時期などは石室内が壁画部分まで浸水するありさまで、壁画の風化損傷が懸念されていた。そこで、王墓山古墳に引き続き宮が尾古墳の保存整備事業を実施することになった。

次章で宮が尾古墳保存整備事業を実施年次別に解説する。



第10図 降雨後浸水した石室内部（H 5.8）

第三章 整備事業に伴う予備調査と公有地化事業

有岡古墳群として指定を受けた6基の古墳のうち、昭和61年度から平成3年度までに王墓山古墳の保存整備事業を完了したが、発掘調査や整備工事については、事前に実施内容を検討するための調査整備委員会を設置している。

委員会では現地視察にも多くの時間を費やし、事業全般を通じていただいた積極的なご指導と、数多くの貴重なご意見は、それぞれ調査や整備工事に反映させた。

宮が尾古墳保存整備事業についても、この委員会に継続して指導を求めた。委員会は史跡の公有地事業のみを実施した平成5年度以外は毎年開催した。調査整備委員会組織は以下のとおりである。



第11図 調査整備委員会開催風景（H 7.12）

会長	善通寺市文化財保護審議会委員	松浦 修
副会長	奈良国立文化財研究所 平城宮跡発掘調査部長	町田 章
委員	奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター 研究指導部保存工学研究室 主任研究官	内田 昭人
委員	香川大学経済学部教授（考古学）	丹羽 佑一
委員	元香川大学農学部教授（造園学）	吉田 重幸
（指導）	文化庁記念物課 文化財主任調査官	田中 哲雄
（指導）	香川県教育委員会 文化行政課	
（事務局）	善通寺市教育委員会 文化振興室	

1. 平成4年度事業（墳丘の確認調査）

宮が尾古墳は私有地中に覆屋で保護され保存されていた。装飾古墳ということで、発見直後にスレート製覆屋が地中への入口上部に造られ、しばらくしてコンクリート製の強固な構造物に造り代えられ鉄製の丈夫な梯子も設置された。しかしながら、宮が尾古墳は前述したように覆屋で當時密封された状態にあり、年間を通じて湿度は極めて高い。夏期は一時的に壁画が乾くが部分的にカビが発生しやすい状態である。しかも梅雨時や台風シーズンの多雨期には石室内が頻繁に水没し、壁画の損傷が懸念されていた。

そこで石室内に水が侵入しないようにする方法を検討するために、湧水の原因を究明する必要が生じた。また、本格的な整備を実施するためには史跡を公有地化する必要があるが、宮が尾古墳の場合は墳丘が完全に地中に隠れていたため、その正確な規模や形状は不明である。史跡指定の段階では、横穴式石室を中心とした比較的広い範囲を対象としたが、この範囲内に確実に遺構が納まるか否かを公有地化する前に確認する必要もあるため、遺構を円墳と予想し、

石室を中心に果樹を避けた三方向に幅1mのトレンチを設定した。また、湧水との関連を調べるために周辺部に造られている溜池や井戸を含めての詳細な地形測量も実施した。

まず、第1トレンチは横穴式石室の主軸方向と併せて奥壁部から北方向に設定した。第2トレンチは石室の中央部から東北東方向に設定し、これを西南西方向に延長し第3トレンチとした。いずれのトレンチでも墳丘面は容易に確認できたが、遺構面上には砂状の花崗土が多量に堆積しており、掘削するとすぐに壁面が崩壊する危険な状態であった。

第1トレンチでは他の比較して墳丘がやや痩せているが、谷側に面しているため他の部分より浸食が進んだものと考えられた。

第2トレンチでは墳丘表面を確認しこれを追ったところ、最深部では軟弱な地盤を地表面下約4mも掘り下げることになった。ここで周溝状の遺構が確認できたが、崩壊を繰り返し危険な状態と判断されたため、板や角材で補強を試みた。しかし実測を待たずしてトレンチが崩落したため、これ以上の掘削は危険と判断し直ちに埋め戻した。第3トレンチでは農道に阻まれて周溝部分までは検出できなかったものの第2トレンチとはほぼ同様の結果が得られた。

トレンチによる調査の結果、地中に埋没した墳丘の遺存状態は良好であることが判明した。形状は直径約20m、高さは復元高で約4mの円墳であり、少なくとも墳丘は史跡指定範囲内に完全に納まっていることが確認できたが、墳丘周囲の関連遺構の確認作業は、安全面を考慮すると現状では不可能であった。いずれにせよ最終的には史跡指定範囲内全体は地形を古墳構築当時の状態に復元することが必要であり、墓道などの確認作業はその際に実施することとした。

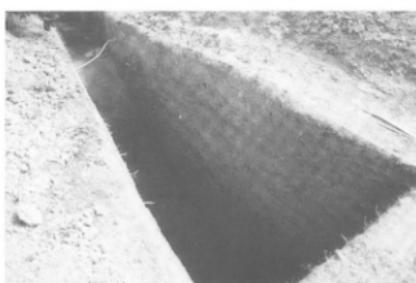
またトレンチ調査によって、昭和41年の発見の際に生じた玄室中央の天井石の隙間を別な石



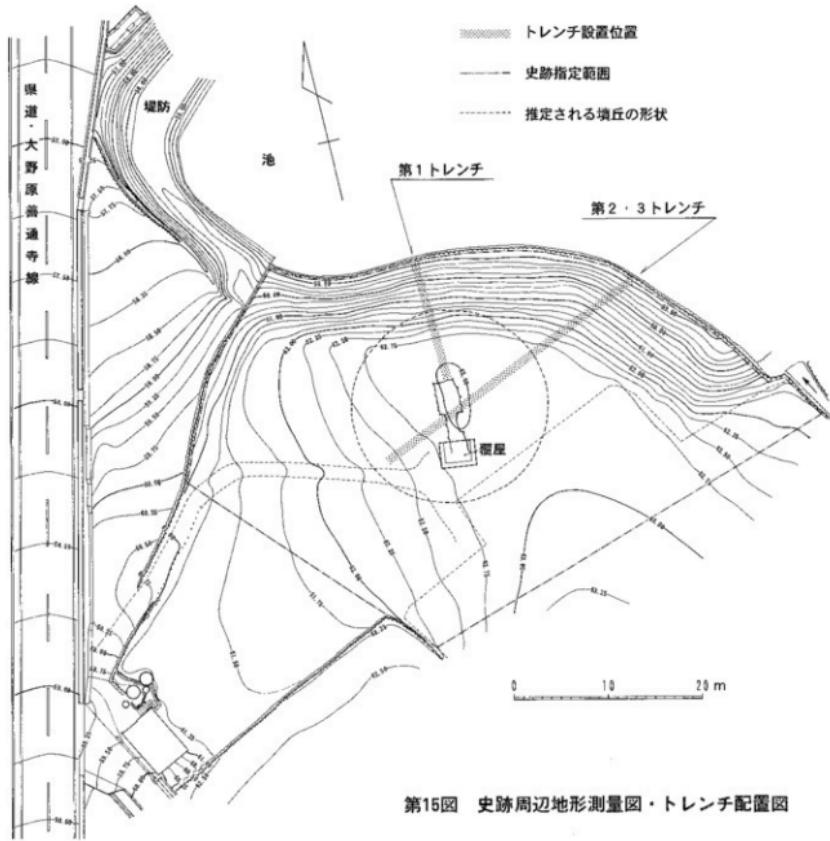
第12図 第1トレンチ検出状況



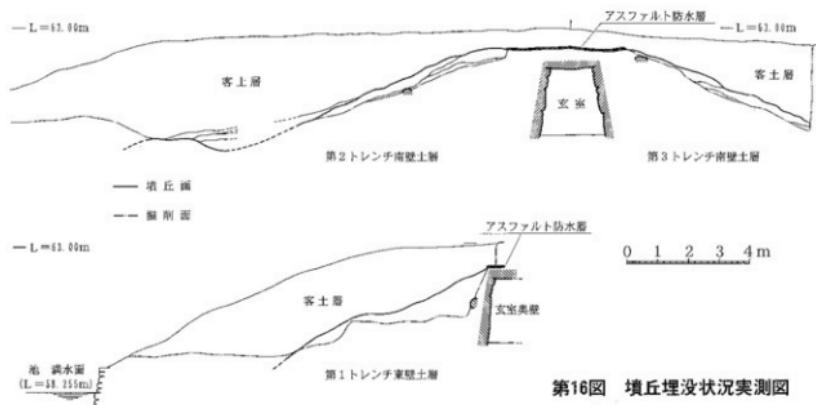
第13図 第2トレンチ墳丘検出状況



第14図 第3トレンチ検出状況



第15図 史跡周辺地形測量図・トレンチ配置図



第16図 墟丘埋没状況実測図

材で補充した後に、その上をコンクリートで覆い周囲に排水溝を巡らし、表面にはアスファルトが塗布されている状況が確認できた。

石室内部では主要壁画のある3箇所を除いた石材の表面に樹脂が厚く塗布され、石と石の隙間はコンクリートが詰められていたが、これも同じ時に施工されたものと思われる。発見後頻繁に石室内に雨水の侵入が確認され、対応として施された応急処置であるが、樹脂により観察が不可能になった線刻画もあり残念である。そこで樹脂の除去を前提に施工時の記録を探したが、関係資料は保存されておらず、今回の作業中に東亜道路株式会社（平塚仁氏）の協力を得て樹脂の科学分析や除去試験を実施した。結果は以下のとおりである。

「過去の塗膜時に下地岩石面が湿潤していたため、樹脂が完全に密着していない部分が認められたので、そこから3cm四方の大きさの樹脂塗膜片を採取し、このサンプルを用いて科学分析と有機溶剤等による溶解実験を行った。

その結果、赤外吸収スペクトルでの測定により、芳香核・メチル基・メチレン基・エーテル基・水酸基（第2アルコール性質水酸基と思われる）と思われる吸収スペクトルが検出されている。ただし

吸収強度において、文献による標準スペクトルでの比較をすると、異なる点があるため断定はできないが、一般的なエポキシ樹脂／ポリアミンの化合物と考えられる。この結果を受けて、塗膜サンプルを有機溶剤中に浸漬させたところ多少膨潤し柔らかくなつたが、現地で浸漬という作業は困難である。そこで塗膜除去剤を用いることが検討された。この方法により樹脂塗膜はウエス等で容易に拭き取れ、更に水洗することで完全な除去が可能であることが判明した。

そこで作業が容易であり、壁画への影響が最も少ないと考えられる場所を選定し、石面15cm四方が露出するように養生シートにて覆い、埃等を取り除いた後にハケで潤滑剤を少量塗布した。約30分放置後、水を含んだウエスにて丁寧に遊離した樹脂を取り除いた。塗膜が厚い部分はこの作業を繰り返し、最後に水を含ませたハケで表面を洗うと樹脂塗膜がきれいに除去できたが、石室内部が密封状態で出入口が一箇所しかないため、作業員の人数に関係なく、ダクト等の設備を用いて強制的に空気の循環を図る必要があると判断された。」

横穴式石室は主にこの地特有の讃岐岩質安山岩で構築されている。この石材は強靭であり風化に強いが、単体で地中に存在している間に表面に生じた厚さ1～2mmの風化層は極めて軟質であり、線刻画はこの部分に描かれている。除去試験では樹脂は見事に溶解し除去されたが、石材表面の風化層も繰り返された洗浄作業により部分的に摩滅し、壁画面に全く影響を与える樹脂を除去することは現状では不可能であることが判明した。このことは調査整備委員会でも検討されたが、主要壁画部分には樹脂が塗布されていないことや、樹脂が塗布されている箇所についても壁画の保存を重視し、これが安全に除去できる新たな技術が開発されてからの除去を検討すべきとし、本事業において除去作業は実施しないことを決定した。



第17図 樹脂除去試験作業風景

なお、平成4年度の事業費は以下のとおりである。

平成4年度決算額		事業内容及び執行額
総事業費	3,025,244円	・発掘調査経費 1,959,890円
国庫補助金	1,500,000円	・調査・整備委員会経費 17,860円
県補助金	500,000円	・周辺部地質調査委託費 226,600円
市費	1,025,244円	・樹脂分析調査委託費 51,000円
		・発掘調査概報印刷費 629,929円
		・事務経費 139,965円

2. 平成5年度事業（公有地事業）

平成5年度は平成4年度の調査結果を受けて史跡の公有地化事業を実施した。史跡指定地は私有地（普通寺町宮が尾3214-13）5,757m²のうち1,710.06m²であり、不動産鑑定による評価額を地権者に提示したところ公有地化には応じてくれたが、「指定範囲をすべて売却すれば残地への進入路を断たれるため、遺構の保存と整備に支障のない範囲を残して欲しい」旨の要望があった。

そこで果樹園の管理に必要な幅の進入路(41.68m²)を残した範囲(1,668.38m²)を買い上げ、その範囲内の立木及び農業関連施設の補償を行った。文筆後の史跡の地番は宮が尾3214-45である。

また、当該地は目前に県道・大野原普通寺市線が走るが、史跡の周囲は私有地や池に囲まれて孤立している。そこで整備をすみやかに実施し更に活用を図るために、史跡と県道の間に位置する土地(436m²)が進入路や駐車場施設として必要不可欠と判断され、この土地に関しては普通寺市が単独で公有化した。

史跡公有地化事業及び市の単独公有地化事業の実施範囲は第20図に示した。また、平成5年の事業費は以下のとおりである。

平成5年度決算額		事業内容及び執行額
総事業費	37,500,528円	・土地購入経費 31,699,220円
国庫補助金	30,000,000円	・立木竹建物等移転補償経費 5,421,308円
県補助金	3,750,000円	・事務経費(不動産鑑定料) 380,000円
市費	3,750,528円	

市単独事業	5,888,610円	史跡隣接地買上経費及び農業関連施設補償等経費
-------	------------	------------------------



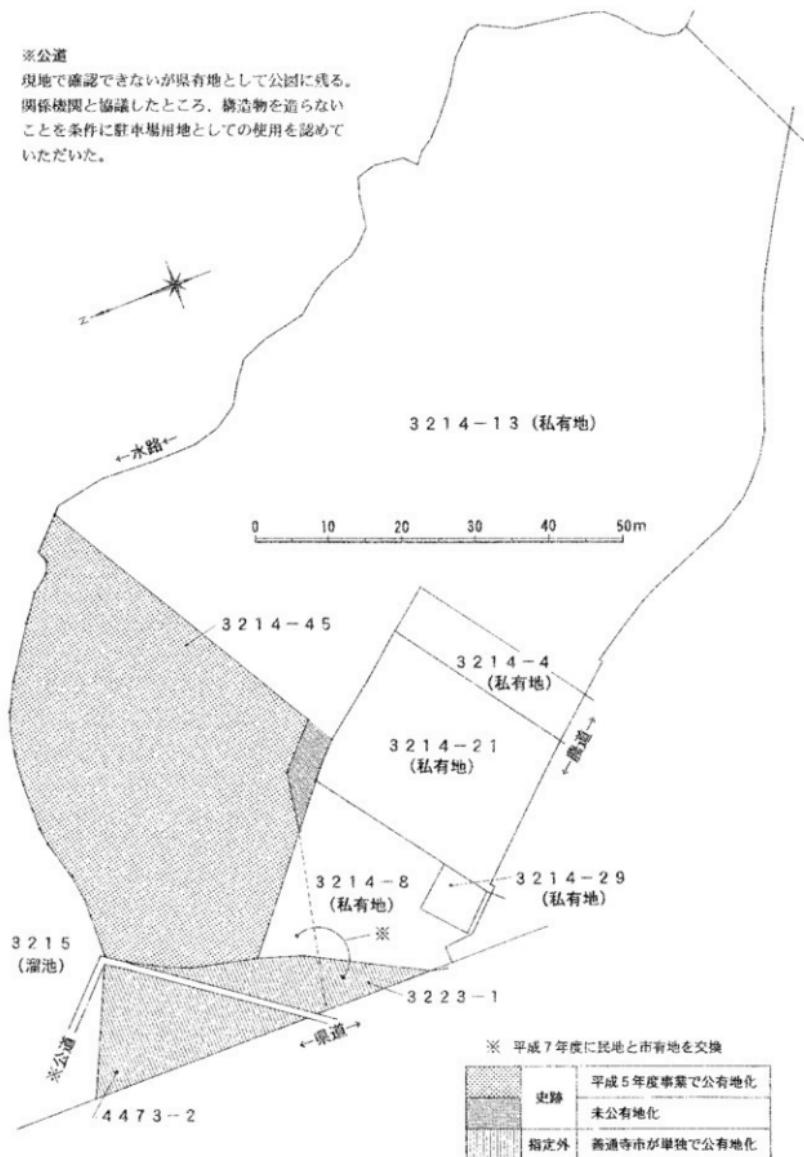
第18図 公有地化前の状況



第19図 公有地化後の状況(伐採後も地中に埋没した墳丘は見えない)

※公道

現地で確認できないが県有地として公園に残る。
関係機関と協議したところ、構造物を造らない
ことを条件に駐車場用地としての使用を認めて
いただいた。



第20図 宮が尾古墳及び隣接地公有地化状況

第四章 整備事業に伴う発掘調査

3. 平成6年度の発掘調査

(1) 宮が尾古墳墳丘の検出

平成6年度は、平成4年度の試掘調査によって地中に埋没していることが確認された直径20m程の墳丘を検出し、更に墳丘上に客土された膨大な土砂を撤去する作業を実施した。これは江戸時代末頃までこの場所に威容を誇っていた宮が尾古墳を、再び埋没直前の状態に削り出す作業であり、発掘調査というよりはむしろ土砂の撤去作業が中心となった。

この作業によって宮が尾古墳墳丘の遺存状態は極めて良好であることと、これに隣接して構築されている別の円墳の存在が確認されたことは大きな収穫であった。詳細はそれぞれ後述する。

さて発掘調査は、墳丘が浅く遺存している覆屋周辺部は人力で掘削したが、客土が厚く堆積している範囲は重機を用い、墳丘に近づいた時点では人力による掘削に移行し作業を続けた。

大型掘削重機及び排土運搬のための車両は、史跡北西側の県道から昨年度市が単独で公有地化した土地を抜けて直線的に設置した仮設道を往来した。

まず堆積している土砂のうち半分程を除去しながら史跡指定地の奥まで進入し、最後に遺構面までの土砂を凌えながら後退し、宮が尾古墳墳丘全体を検出した。重機はともかく、土砂を満載した車両は軟弱な土砂より動きが取れず、遺構直上に足場用の礫を多量に敷設しながら、また掘削により周囲に生じた軟弱で大きな壁面を懸念しながらの気を揉む作業であった。

検出された墳丘は南から北に緩やかに下る傾斜地に構築されており、規模は南北に



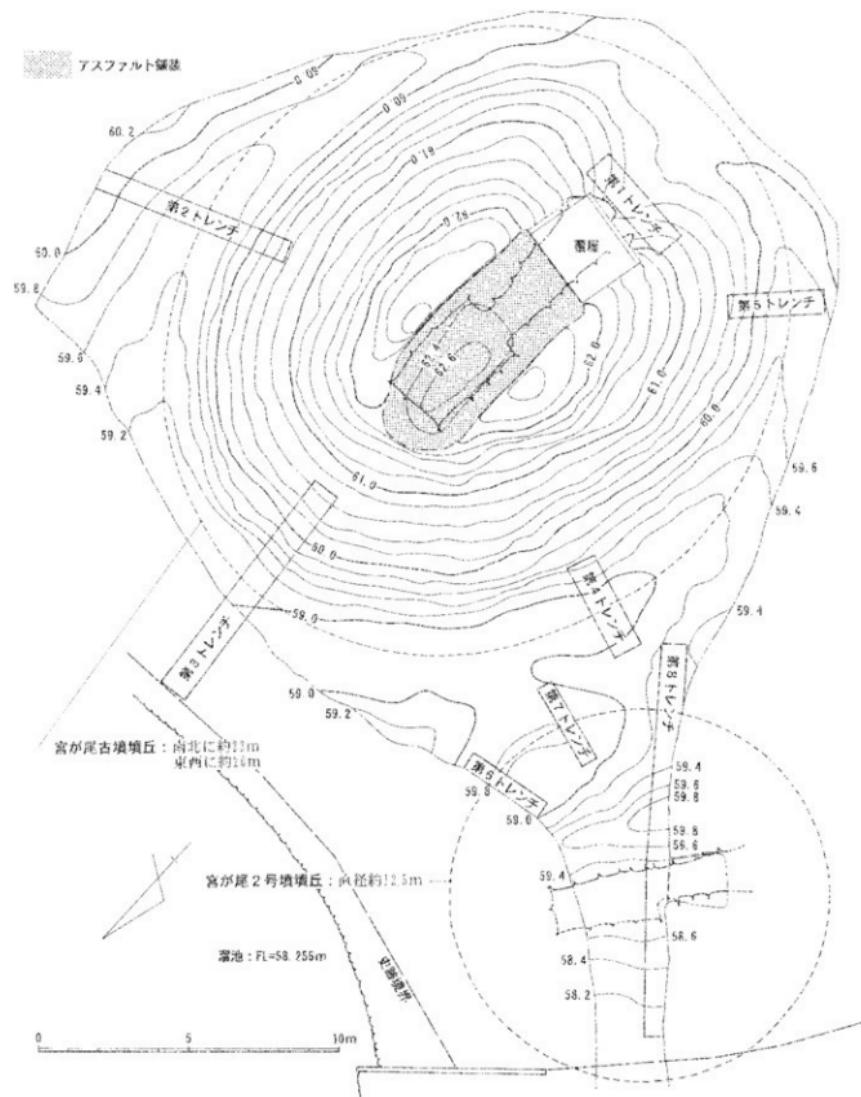
第21図 宮が尾古墳墳丘検出作業風景



第22図 重機による掘削作業と進入路



第23図 検出された宮が尾古墳墳丘と測量風景



第24図 宮が尾古墳及び2号墳墳丘検出状況実測図（トレンチ配置図）

約22m、東西に約20m、高さは復元高で約4.5mを計り、周囲には浅い周溝状の遺構が残る。

覆屋の基礎は予想以上に深部に及んでいたが遺構への影響は殆ど無く、基礎の下側に転落した天井石の一部が露出しているが、これは石室内部からも観察できるものである。本年度は石室の管理のために覆屋は現状のまま置き、平成7年度の開口部全体の発掘調査の際に撤去することとした。

開口部全体は大きな窪みとなって遺存していた。今回の調査ではこの部分に石室の主軸方向に直交する形で第1トレンチを設定したところ、多数の石材が折り重なるように堆積しており、一部墓道状の遺構も確認できた。開口部両側の石材の崩落に伴い天井石がずれ落ち、開口部はそのまま埋没したらしく、平成7年度の発掘調査で構築当時の開口部の構造を知る手掛かりが得られるのではないかと期待された。(第25図参照)

トレンチは他にも墳丘裾部に墳丘の中心から放射状に4箇所(第2~第5トレンチ)に設定している。第2トレンチでは地山を削り込んだ浅く幅の広い周溝を経て緩やかに外に上がる地形となっており、墳丘側は整形された地山上に盛土されていることが確認できた。

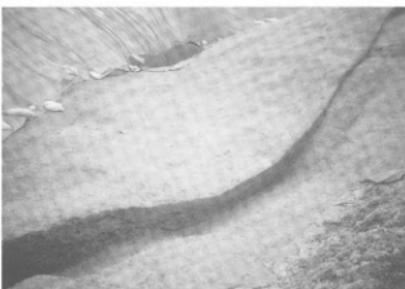
第3トレンチでは鋭角的に掘り込んだ、やや深く幅の狭い周溝と、その外側に堤防状に盛られた人為的盛土を経て下の谷部に続く地形が確認された。周溝を掘削した際の土砂ではないかと考えられる。

第4トレンチでは浅く幅の広い周溝を経て、新たに発見された2号墳の周溝に連続している。

第5トレンチでは浅い周溝の底に堆積した炭化物と須恵器の高壙が確認された。こ



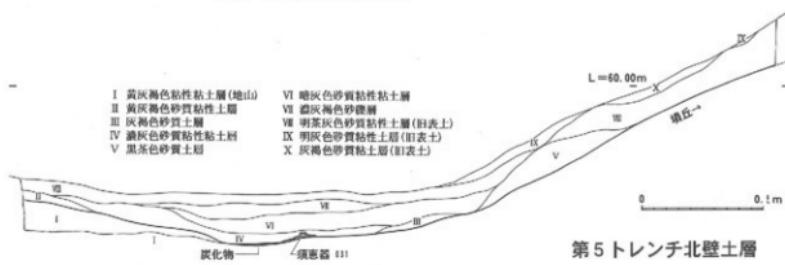
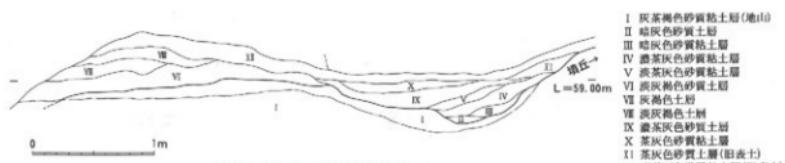
第25図 第1トレンチ検出状況



第26図 第2トレンチ検出状況



第27図 第2トレンチ南壁土層実測図



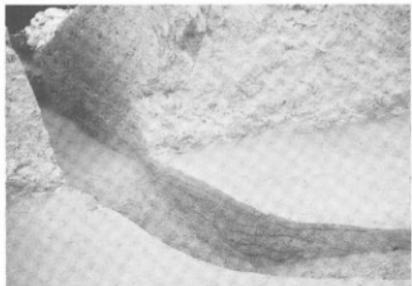
第28図 第3・第5トレンチ土層実測図

の時点では宮が尾古墳の副葬品であるか否かの判断は困難であったが、平成7年度の調査で玄室から運び出された副葬品の可能性が高いことが解った。また、墳丘側は地山から途中で盛山に変化するとみられるが、このトレンチ内では明確にできていない。

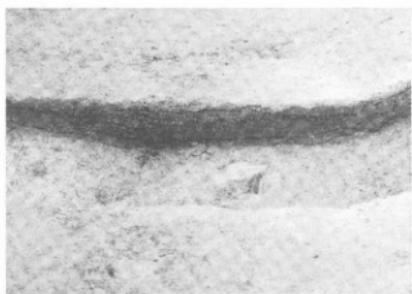
今回のトレンチによる調査は、古墳の規模や形状を把握するためのもので、調査範囲などは最小限度に留めてある。しかしながら、埋没した閉口部は復元が必要であり、構築当時の状態に正しく復元するためには崩落し埋没している状況を発掘によって調査する必要が生じた。

また、羨道内部には大きく変形した箇所があり、この部位の取り扱いを調査整備委員会で協議したところ「この機会を逃せば変形した状態で永久に保存される。閉口部は復元だけでなく部分的な解体修理も必要であり、羨道の変形箇所についてもこれと併せて解体修理を実施すべきである」と判断された。

そこで閉口部から羨道にかけて、そして変形した羨道部の解体修理によつて影響を



第29図 第3トレンチ検出状況



第30図 第5トレンチ遺物出土状況

受けると予想される墳丘の一部の発掘調査を平成7年度に実施した。(51頁～57頁参照)

(2) 宮が尾2号墳の発見

史跡内に客土された膨大な土砂を搬出するための仮設道を県道側から設置し、宮が尾古墳墳丘検出後にはその仮設道上の土砂を除去しながら重機を後退させた。自然地形に合わせて緩やかに下るものと思われていたが、史跡北端において墳丘の盛土と思われる人工的な高まりとなり、この高まりの北側で安山岩の石列が確認された。

そこで小トレンチを設定してこの石列付近を調査したところ、石列南東側は版築土層による墳丘、石列北西側は水平に堆積した円礫上に須恵器や鉄器が多数遺存しており、これが古墳の玄室内であることは容易に確認できたが、遺構の遺存状態は極めて悪く玄室北西側壁は完全に失われていた。

これを宮が尾2号墳とした。未調査部分は多量の土砂で覆われていたため、平成7年土に宮が尾古墳開口部などと併せて発掘調査をすることとした。

今回設定したトレンチの調査結果及び玄室内部の調査結果は、平成7年度実施分の調査結果と合わせて58頁～79頁に掲載した。

平成6年度には発掘調査の他、調査結果を基に史跡保存整備工事の実施設計を実施した。また、市単独事業として史跡隣接地の土地買上事業（土地の公有地化は平成5年度に完了しており残金の支払いのみ）を実施している。事業費は以下のとおりである。



第31図 宮が尾2号墳検出状況（宮が尾古墳墳丘上から撮影）



第32図 宮が尾2号墳玄室検出状況

平成6年度決算額		事業内容及び執行額	
総事業費	10,136,127円	・発掘調査経費	6,767,747円
国庫補助金	5,000,000円	・調査・整備委員会経費	72,380円
県補助金	1,666,000円	・史跡保存整備事業実施設計委託費	2,472,000円
市費	3,470,127円	・地質調査委託費	669,500円
		・事務経費	154,500円
市単独事業	7,277,718円	史跡隣接地買上経費及び農業関連施設補償等経費	

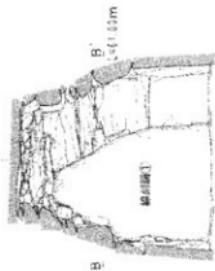
4. 平成7年度の発掘調査

(1) 宮が尾古墳

①調査着手前の状況

今回の発掘調査の内容を解説する前に、昭和41年に宮が尾古墳が発見された際の出土遺物や石室の構造、線刻画の内容について紹介する。

石室の構造は両袖式の横穴式石室で、主軸方位はほぼ北を向いている。玄室の長さは3.5m、幅は奥壁側で2.0m、玄門側で2.4mを計る。天井は3枚の巨大な板石が架設されていたようであるが、発見当時中央部の石材は失われていた。実測図に見える中央の石材は埋め戻しの際に充填されたものである。天井石は玄室の前後に一枚づつ置き、中央の石材は更にその上に乗せるため玄室天井中央が壓根のように高くなる形状を呈したこの地区特有のものである。高さは奥壁側で2.2m、玄門側で2.3mを計る。中央部では2.7~2.8m程度と推測される。



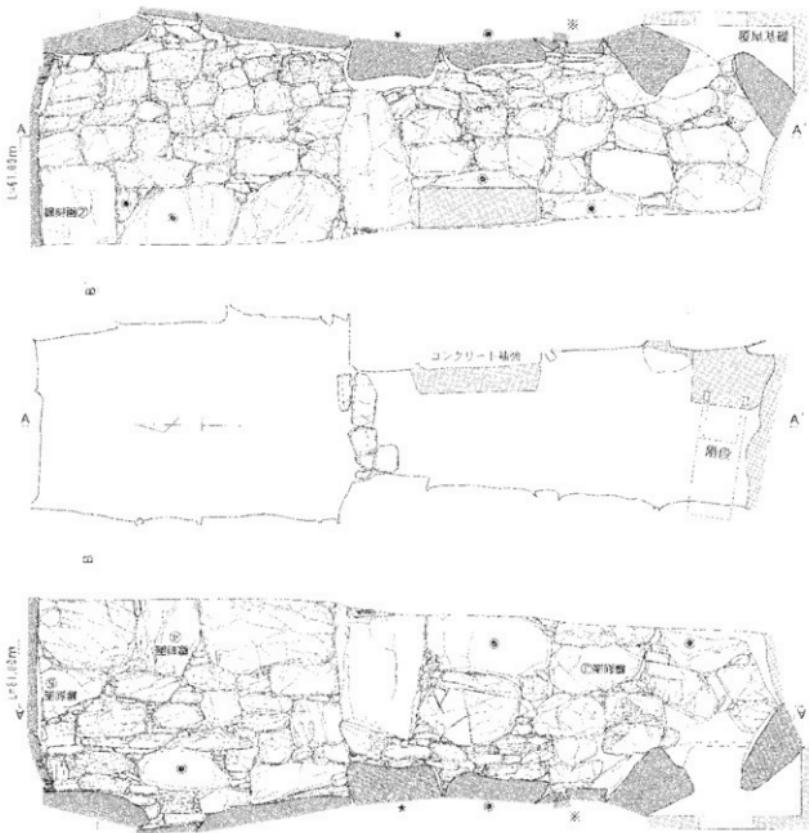
羨道は開口部付近が埋没しているため全長は不明であるが、基底部で少なくとも4.8m（平成7年度の調査で約5.7mの規模が判明）、幅は玄門手前で1.5m、開口部付近で2.0mを計るが、玄門部幅は1.2mとやや狭まっている。天井までの高さは玄門部では仕切石があるため1.7mとやや低いが羨道部では平均2.0mある。

羨道部の天井石は玄門部を含めて4枚である。開口部では1枚が完全に崩落し2枚目は大きくずれて斜めに止まっている。この2枚の石材の間に鉄製の階段を掛け見学のための進入口として来た。実測図の羨道天井断面部分に見える小型石材群（※）も埋め戻しの際に充填されたものである。また、羨道東壁最下段北端の石材は石室内側に大きく倒れ、その上部壁面も大きく内部に膨らみ出しているため、埋め戻し覆屋を建設した際にコンクリートと鉄筋で補強されていた。

石室を構成している石材はこの周辺の地質環境を反映しており、柱状岩しくは板状の安山岩を中心に、丸みを帯びた角礫凝灰岩や風化花崗岩が少鼠合まれている。安山岩は非常に強固であるが、大抵の物は表面に薄い風化層があり、比較的硬い道具で引っ掻けば容易に深さ1~2mmの線が描ける。普通市内だけでも宮が尾古墳を含めて8基の装饰古墳が残る理由の一つに、線刻画で墓室を装饰する習俗の存在だけでなく、石材としての石材に恵まれていたことも挙げられる。市内では同様の石材で造られた弥生時代後期末頃の箱式石棺が人面や鳥、弧帶文などの線刻で装饰された例も発見されている。

宮が尾古墳横穴式石室の線刻画は実測図に示した①~⑤の他、数箇所に平行線も見えるが、主要な線刻画以外は前述したように厚い樹脂で覆われており、詳細を観察することはできない状態である。

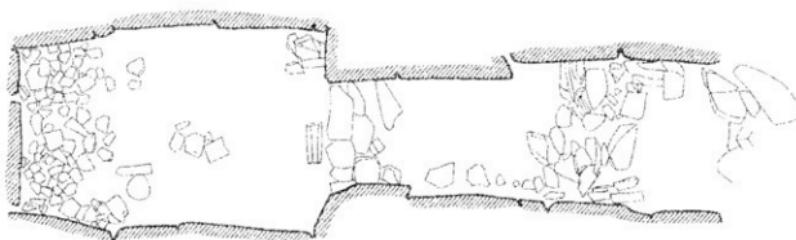
石室内は前述したように近世まで人の出入りが頻繁であったらしく、殆どの副葬品は失われており、須恵器（坏蓋）と刀子、耳環2点が出土しただけであったため、古墳構築時期の特定には至っていない。また、玄室北西隅部の裏面は茶褐色に偏食し剥落が著しく、この場所で焚火が行われた可能性が高い。玄室奥壁の線刻画群の下方の損傷もこの剥落によるものである。



第33図 整備事業着手前の宮が尾古墳横穴式石室実測図

10m

● 葦灰岩 ★ 花崗岩
その他の全て安山岩



発見当時の石室床面の状況「日本装飾古墳の研究」齊藤 忠(講談社1973年1月)から



第34図 宮が尾古墳出土遺物実測図

出土遺物は第34図に示した。以下、線画について解説する。

線刻図①(玄室奥壁の壁画群)：玄室奥壁の左側に配置された広い平牀面を有する巨石には人物群・大勢の人が乗った船・騎馬人物・船団・武人が巧みに描かれている。この石材の表面には、石材が採取される以前からあったとみられる黒い珪酸分の付着が認められるが、壁画はこの付着物や亀裂を避けてほぼ一面に描かれている。

壁画群はモチーフごとに微妙な表現や線の太さや深さが異なっているが、それぞれは重なり合わずバランスよく配置され、最下の武人を除いて同じ縮尺で描かれているため、一時期に、複数の人物によって描かれた可能性が高い。

人物群 ほぼ目の高さにあり、また人物というモチーフが判り易いためであろうか、一番最初に目に止まるのがこの人物群である。これを描いた人物の表現力は優れており、しかも石材という硬い素材に慣れているようである。それぞれの人物の動きまでも見事な曲線が描き分けしており、描き損じの線や修正痕は全く認められない。

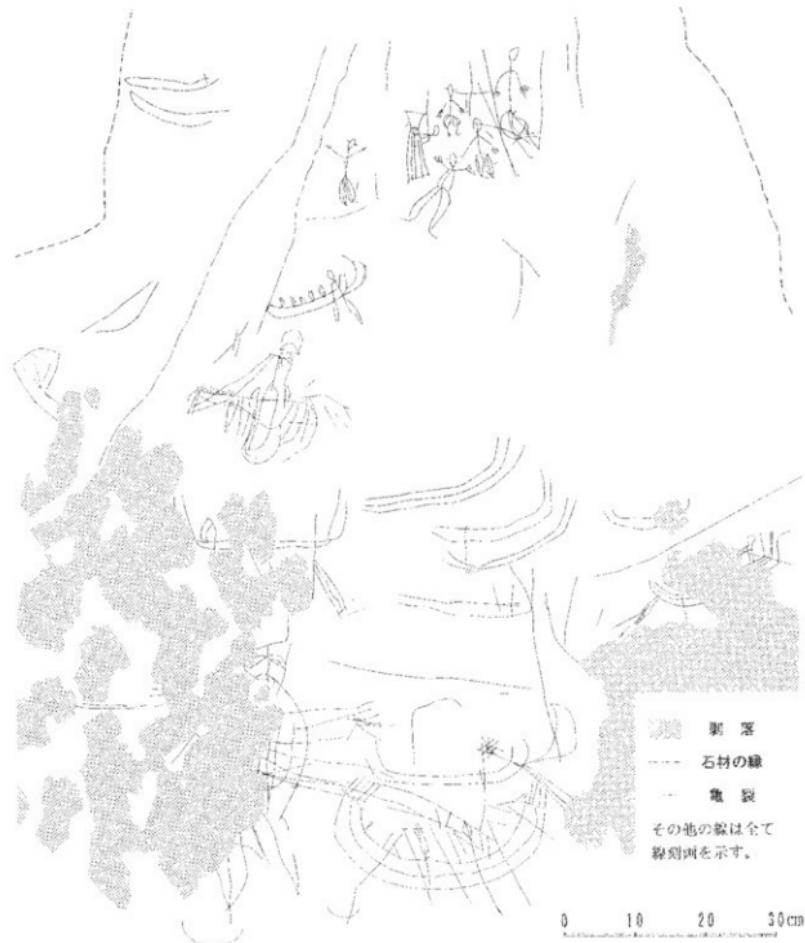
この人物群で最も注目されるのは、人物群の中心に描かれた小型の家のような图形である。人物はこれを中心に配置されているようである。この图形については最近まで言及されることはないが、市内で次々と確認された装飾古墳でも同様の图形が多く描かれていることが判明し、類例を調査するうちに、古代の葬送儀式で仕様される「殯屋」である可能性が考えられた。これを「殯屋」と結びつけるに至った点については、84頁の「県内の装飾古墳～宮が尾古墳と周辺の装飾古墳を中心として～」を参考にしていただきたい。

さて、この人物群は二つのグループに分けられる。殯屋の前の人物2体は直立し両手を大きく左右に開き向かい合っている。この躍動感に対して右後方の人物3体には動きが全く無い。いずれも両手をだらりと垂れ、目前の儀式を傍観しているか、待機しているかの如くである。また、全員が下半身にスボンのような物を纏っているが、殯屋前右側の人物以外は全員上半身裸のようないわ表現である。

殯における重要な儀礼の一幕であろうか。とすれば、余体をみてもこの人物群がこの壁画群の中心的存在ではないかと考えられるが、更によく見ると殯屋の中、若しくはその背後からもう1体の人物が上半身を覗かせているような表現が認められる。二つの異なるモチーフを重ねて前後関係を表現したこのような例は古墳壁画は稀であるが、殯の期間はまだ死が確定していないと考えていた古代人の復活願望の表現であるのかも知れない。記紀にみられる神話が彷彿

とされる。

一般的に裝飾古墳のモチーフは鎮魂・避邪が目的と考えられているが、墳の習俗にある鎮魂若しくは避邪の儀礼のクライマックスを描き写したものと解釈すれば、他のモチーフとの整合性もある。また、人物の動作については裝飾器台などに立てられた人形のポーズとの共通点が多いことも注目できる。



第35図 宮が尾古墳横穴式石室玄室奥壁壁画群実測図

大勢の人が乗った船 船上には6体の人物が見えるが、“大勢”を表現したものであろう。船体は船首と船尾が上に向かって大きく屈曲しており、乗船した人物の多さから考えても構造船とみられる。船尾の人物のところに2本の櫂が描かれているが、その右側には蛇のような三日月形の構造物が大きく描かれている。船体と比較して高い位置に描かれており、同様の表現が下方の船体にも見られることから、船に必要な當時では一般的な蛇以外の構造物を考える必要があるかも知れない。今後、他の美術古墳の船の絵や船形埴輪などとの比較が望まれる。

騎馬人物 騎馬人物を描いた線は、これより上に描かれた壁画群の線と比較して明らかに細く、影りも浅い。また人物の表現方法も異なっており、線刻を施した第二の人物の存在が考えられる。しかしながら表現力はやはり優れており、馬の体の特徴を含めて、面擦・手綱・鞍(前輪・後輪)・鎧・障泥など細部まで丁寧に表現されている。馬上で手綱を持つ人物の頭部には、冠か帽子を被ったような表現も見える。

船団 上(右)の下半分には多数の船が描かれているが、上の船とは異なり乗船した人物の表現は認められない。中段右端に描かれた船にのみ櫂を操る人物が描かれているが、船体中央部が剥落しているため詳細は不明である。

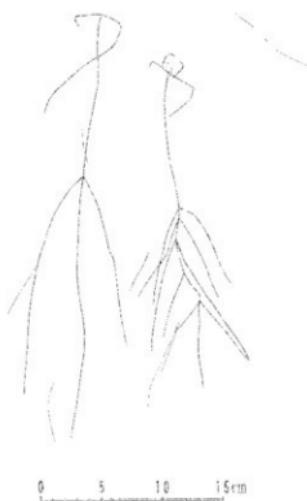
殆どの船は2~3本の線条のみで簡単に表現されているが、最下段の船は大きく丁寧に描かれており櫂の数も多い。この船の絵は石室床面から10cm程の位置に描かれている。壁画の実測作業の際に感じたことであるが、この状態でこの位置に均整の取れた絵を描くことは至難の業であり、石室構築以前、つまりこの看板が設置される以前に既に既に描かれていた可能性が高い。実際に市内の美術古墳の中に構築以前に壁画を描いたことが明らかな資料も確認されている。また、船団のうち上方のものは比較的太く深い影りの線刻であるのに対して、下方のものは細かく浅い影りの線刻である。

武人 奥壁のモチーフは殆どが共通した締尺で描かれているのに対して、下方左側には武人が大きく描かれており異様な感じを受ける。大きく描かれていることで服装や装飾品の細部まで表現されている可能性が高いが、残念なことにこの部位は大半が剥落してしまっている。

この巨石には、これらの壁画群意外にも上方左側に船のような表現や意味不明な線刻がみられるが、表現力は他のものと比較して異なり後世の落書きとも考えられる。

壁画群全体で一つの物語を表しているようにも思われるが、一般的な美術古墳の解釈と同様に鎮魂が目的と考えられる。しかしながら、殯の儀礼らしい表現と船の多さは特異である。

線刻図②：不明モチーフ 玄室東壁最下段奥壁側の石材には、やや表現の異なる相似图形が2点並んで描かれているがモチーフは不明である。人物のようにも植物のようにも見える。



第36図 玄室東壁不明線刻図実測図